

くろづ
藏人古墳群・藏人Ⅱ遺跡

- 発掘調査報告書 -

1999

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成9年11月4日から平成10年3月31日まで実施した、静岡県掛川市下垂木字三田ヶ谷863—1他に所在する蔵人古墳群・蔵人II遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、蔵人古墳群・蔵人II遺跡地内で計画された住宅団地造成工事に先立つ緊急の発掘調査で、「蔵人古墳群ほか遺跡埋蔵文化財発掘調査事業委託」として、株式会社川島デベロップの委託を受け、平成9年度に発掘調査、平成10年度に整理調査を掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査では、事業主である株式会社川島デベロップをはじめ周辺土地所有者には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の村松弘規が担当した。
5. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。

大石トモ・袴田きよ・堀内ひろ・松浦てつ子・山崎国・梅津まさあ・松浦まさ子・松浦富美江
萩内光恵・清光真由美・児玉昌子
6. 本書の編集・執筆は村松が担当した。
7. 発掘調査の業務は、掛川市教育委員会教育長木曾忠義、社会教育課長清水功、社会教育課文化振興室長尾秀雄、文化振興係長大川原淳哲のもとに社会教育課が所管した。
また、整理調査の業務は、掛川市教育委員会教育長木曾忠義、文化課長染葉暁夫、文化課主幹兼文化財係長尾秀雄のもとに文化課が所管した。(組織名称変更は、平成10年度教育委員会内の機構改革に伴うものである。)
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掘団における方位は、磁北を示す。(平成9年11月現在)

2. 本書で使用した遺構名称は次のとおりである。

S B : 竪穴住居跡 S D : 溝状遺構

S F : 古墳主体部 S X : 集石遺構

目 次

例言・凡例

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる環境	3

II 調査の内容

1. 遺構	5
1) 蔵人古墳群	
①藏人 1 号墳	5
②藏人 15 号墳	8
2) 集石遺構	
①S X01	13
②S X02	13
3) 蔵人 II 遺跡	
①S B01	13
2. 遺物	16

III まとめ	18
---------------	----

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図	1
第2図 遺跡周辺地形図	4
第3図 藏人1号墳全体図	6
第4図 藏人1号墳実測図	7
第5図 藏人15号墳全体図	9
第6図 藏人15号墳実測図(1)	10
第7図 藏人15号墳実測図(2)	11
第8図 S X01・02実測図	12
第9図 藏人II遺跡全体図	14
第10図 S B01実測図	15
第11図 出土遺物実測図(1)	17
第12図 出土遺物実測図(2)	18

図 版 目 次

図版I (上)	発掘調査区全景（左から藏人15号墳、藏人1号墳、藏人II遺跡）
(中)	藏人1号墳全景（空中写真）
(下)	藏人1号墳主体部完掘状況（北東から）
図版II (上)	土師器坏出土状況（南東から）
(中)	藏人15号墳全景（空中写真）
(下)	藏人15号墳主体部完掘状況（南西から）
図版III (上)	S X01検出状況（西から）
(中)	S X01土器出土状況（北から）
(下)	S X02検出状況（北東から）
図版IV (上)	藏人II遺跡全景（空中写真）
(中)	S B01完掘状況（東から）
(下)	S B01土器出土状況（東から）
図版V (上)	S B01土器出土状況微細1（東から）
(下)	S B01土器出土状況微細2（破損前、南西から）
図版VI	出土土器1
図版VII	出土土器2
図版VIII	出土土器3



1. 蔵人古墳群
2. 蔵人Ⅱ遺跡
3. 蔵人遺跡
4. 谷ノ口古墳
5. 堂前古墳
6. 堂前横穴群
7. 苫佐ヶ谷横穴群
8. 月様古墳
9. 十五ヶ谷横穴群
10. 蟹沢古墳群
11. 上神古墳
12. 大橋古墳
13. 別所古墳
14. 別所横穴群
15. 峯遺跡・峯横穴群
16. 狐谷古墳
17. 家代打越古墳
18. 桶田遺跡
19. 中川原古墳
20. 赤湖遺跡
21. 赤湖南遺跡
22. 赤湖古墳
23. 長沢古墳群
24. 七橋古墳
25. 土橋横穴群
26. 山崎遺跡
27. 山崎古墳
28. 権田ヶ谷古墳群
29. 枕田古墳群
30. 宮部古墳群
31. 富部遺跡
32. 森平遺跡
33. 二反田遺跡
34. 八王子神社古墳
35. 鰐原北遺跡
36. 鰐原南遺跡
37. 鰐原横穴群
38. 鰐原古墳群
39. 長谷横穴群
40. 飛鳥遺跡
41. 飛鳥横穴群
42. 小島遺跡
43. 六ノ坪遺跡
44. 源ヶ谷Ⅰ遺跡
45. 源ヶ谷Ⅱ遺跡
46. 源ヶ谷古墳群
47. 四ノ坪古墳
48. 紗張塚古墳
49. 紗張塚遺跡
50. 小山平古墳群
51. 小山平遺跡

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成10年の掛川市政十大ニュースをみると、6位に「第二東名高速道路の本格工事開始」、8位に「新幹線掛川駅開業10周年」が入っている。第二東名高速道路は市北部を横断し、市北西部森町境にインターチェンジ、倉真地区にパーキングエリアが開通当初から併用される予定である。10位以下には「東名高速道路掛川インターチェンジ1000万台突破」、「県総合防災訓練の開催」などがある。県総合防災訓練は市南西部の小笠山総合運動公園建設工事地内で行われた。小笠山総合運動公園は、平成14年のサッカーワールドカップと平成15年の静岡団体の会場として現在建設工事が急ピッチで進められている。ちなみに平成10年の掛川市政十大ニュースの1位は、掛川城公園内に建設された掛川市二の丸美術館の開館である。

新幹線駅開業や東名高速道路掛川インターチェンジ併用開始は、掛川市にとって日本の交通の大動脈への利便性の向上に大きく寄与した。これらの交通機関が利用できることをアピールして、平成3年には東部工業団地（エコポリス）が完工した。平成10年までに12社すべてが操業し、約1300人の従業員が働いている。平成10年の掛川市の工業出荷額は県下8位、前年度比では1位である。これは月産30万台の携帯電話・ポケットベルを生産する工場が東部工業団地で操業しているおかげである。

市の人口動態をみると、平成元年の社会動態は368人だったのが、平成9年には597人と1.6倍に増加した。自然動態は1.2倍の増加であり、これは工場従業員や新幹線及び高速道路を利用する通勤者などが市内へ流入したことが一因として考えられる。その結果住宅需用も増加した。しかし、市内には住宅地となる平地面積が少ないため、民間開発業者や地元組合施行の土地区画整理事業による低丘陵地を造成した大規模な住宅地の開発がバブル景気や土地神話の後押しもあり市内各所で盛んに行われた。家代、長谷、西郷、東名高速道路掛川インターチェンジ周辺の区画整理事業では丘陵地を大きく削り取ったため、市の景観は変貌しつつある。また、これらの開発地域のはほとんどが埋蔵文化財包蔵地内のため、工事前の発掘調査の件数・規模は法外的に増大した。

調査が行われた掛川市下垂木地区は、今から20年前までは幹線沿いに住宅がまばらに点在するだけで、その他は水田が広がっていた。しかし、近年の農業を取り巻く環境の変化などにより耕作されない水田を埋め立てた住宅地が多く造られるようになったため、市内でも世帯数の増加が顕著である。また、幹線沿いには駐車場を完備した小売店舗が次々にオープンし、居住環境が大きく変化している地区である。

今回の発掘調査は、株式会社川島デベロップが計画した蔵人古墳群地内における住宅団地造成工事に起因するものである。平成8年8月13日付けで埋蔵文化財確認調査依頼書が掛川市教育委員会に提出され、平成9年2月17日～21日・24日に確認調査を実施した。その結果、本調査が必要となつたため、双方の調整により平成9年度中に本調査を実施することになり、平成9年11月4日から発掘調査を開始した。

2. 調査の方法と経過

確認調査は開発計画範囲内に幅1mの試掘溝（トレント）を10地点設定して行った。その結果、遺

跡の所在が確認された3地点について発掘調査を実施した。そのうち2地点は確認調査により新たに発見された遺構で、古墳を藏人古墳群15号墳、住居跡を藏人Ⅲ遺跡の名称を付けた。

発掘調査は、調査対象範囲の樹木を伐採後、人力により掘削作業を行った。遺構の検出・遺物の取り上げ・図面作成等は調査地点ごとに1辺5m四方の区画を任意に設定し、この区画に従った。現地での図面は、遺構全体図については20分の1縮尺、遺物の出土状況の平面図等は10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、プローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒、同カラーリバーサル撮影によった。また、業者に委託して、ラジコンヘリコプターによる完掘遺構の空中写真撮影を行った。調査の経過は、次のとおりである。

平成9年11月4日～2月1日 藏人1号墳、藏人15号墳、藏人Ⅲ遺跡の順で、人力による粗掘・遺構確認・遺構掘削・図面作成を行う。

平成10年2月2日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。

平成10年2月2日～2月27日 完掘遺構写真撮影・遺構実測。発掘調査器財の片付。現地引渡し。

整理調査は、平成10年7月に「藏人古墳群ほか遺跡埋蔵文化財整理調査受託事業」として契約を締結し、平成11年3月31日まで発掘調査報告書の作成作業を行った。

3. 遺跡をめぐる環境

藏人古墳群は、今回と同じ事業主である株式会社川島デベロップが計画した住宅団地造成工事に先立ち、昭和60年と平成元年11月から平成2年8月にかけて2度の発掘調査を実施している。1次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、柱穴列、土壙7基が検出された。出土遺物は、弥生時代後期の弥生土器と古墳時代前期の土師器、管玉1である。2次調査では、古墳5基、横穴1基、土壙墓26基などが検出された。出土遺物は、土師器(碗)、須恵器(坏・高坏・壺他)、鉄製品(刀子・鉄鎌)、石製紡錘車などである。

次に、周辺の遺跡のあり方について見てみよう。原野谷川の左岸の沖積地は、中小の河川により開析され、大小の谷が複雑に入り込んでいる。遺跡は主に丘陵上に立地し、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡や古墳群、横穴群が存在している。これまでに実施した発掘調査例としては、藏人古墳群の南側の丘陵に立地する六ノ坪遺跡は、平成元・2年度に行われた調査により、縄文時代から平安時代にかけての住居跡や掘立柱建物、方形周溝墓や古墳などを数多く検出し、大量の遺物が出土した。また、藏人古墳群の西方の丘陵地における家代地区区画整理事業に先立ち、平成2・3年度に調査が行われた赤瀬遺跡(古墳時代前期の堅穴住居跡)・赤瀬古墳群(古墳時代中期末から後期初頭)・中川原古墳(古墳時代中期)・長沢遺跡(時期不明の集石遺構)・打越遺跡(近世末の土壙)などがある。

また、最近の調査例としては、六ノ坪遺跡の西側に位置する六ノ坪Ⅳ遺跡・源ヶ谷古墳群は平成9年に調査が行われ、弥生時代中・後期の方形周溝墓や堅穴住居跡、古墳時代後期の円墳、近世以降の火葬墓、集石遺構が検出され、弥生土器や平安時代の灰釉陶器などが出土した。さらに、平成10年度に飛鳥地内で実施した仮称掛川北病院建設に伴う確認調査では、周知外の古墳1基(飛鳥古墳群と命名)を検出した。この古墳は造成工事対象範囲外に位置するため、現状変更せずに保存が計られるところになった。

このように、周辺の丘陵上には複数の時代に跨る数多くの遺構が存在していたことが明らかとなつておらず、現在開発の及んでいない丘陵上にも遺跡が存在することが予想される。



第2図 遺跡周辺地形図

II 調査の内容

1. 遺構

1) 藏人古墳群

藏人古墳群は、市北部より伸びる山系から複雑に枝分かれする支脈の南端に位置する。「掛川市遺跡地図」によると10基の古墳から構成される古墳時代中期の古墳群である。このうち、6・7・8号墳と新たに検出された2基の古墳が前回までに調査されている。また、9号墳地点では古墳は検出されなかった。今回の住宅地造成工事により、3号墳を除く残りの古墳がすべて消滅するため、まず事前の確認調査を10地点で実施した。その結果、遺構・遺物が検出されたのは3地点のみであった。そのうち、藏人古墳群としての発掘調査は、遺構が確認された1号墳と新たに発見された15号墳の計2基の古墳を対象とした。

①藏人1号墳（第3・4図）

藏人1号墳は古墳群が所在する丘陵地の北端付近に位置する。現況の丘陵は一面に樹木が生い茂っているため古墳からの眺望はそれ程よくない。1号墳は東西方向と南北方向の尾根の稜線の高まりに位置する。確認調査はそれぞれの尾根にトレチを設定し、古墳の規模を確認した。トレチ内からは主体部に相当する遺構は検出されなかったが、東西方向のトレチからは地山を約15cm掘り込んだ段が、南北方向のトレチからも約40cmの同様の段が検出された。これらの段は古墳の墳丘の削り出しの可能性があると判断し、本調査を実施した。

1号墳は標高53mに位置する。確認調査で検出した2ヶ所の墳丘の削り出し部分を結んで規模を復元すると、直径約10mの円墳となる。ただし、墳頂の北側と南西側は急斜面で、削り出しが確認できなかった。墳丘は地山の削り出しにより成形しているが、地形の形状に大きく制約されている。

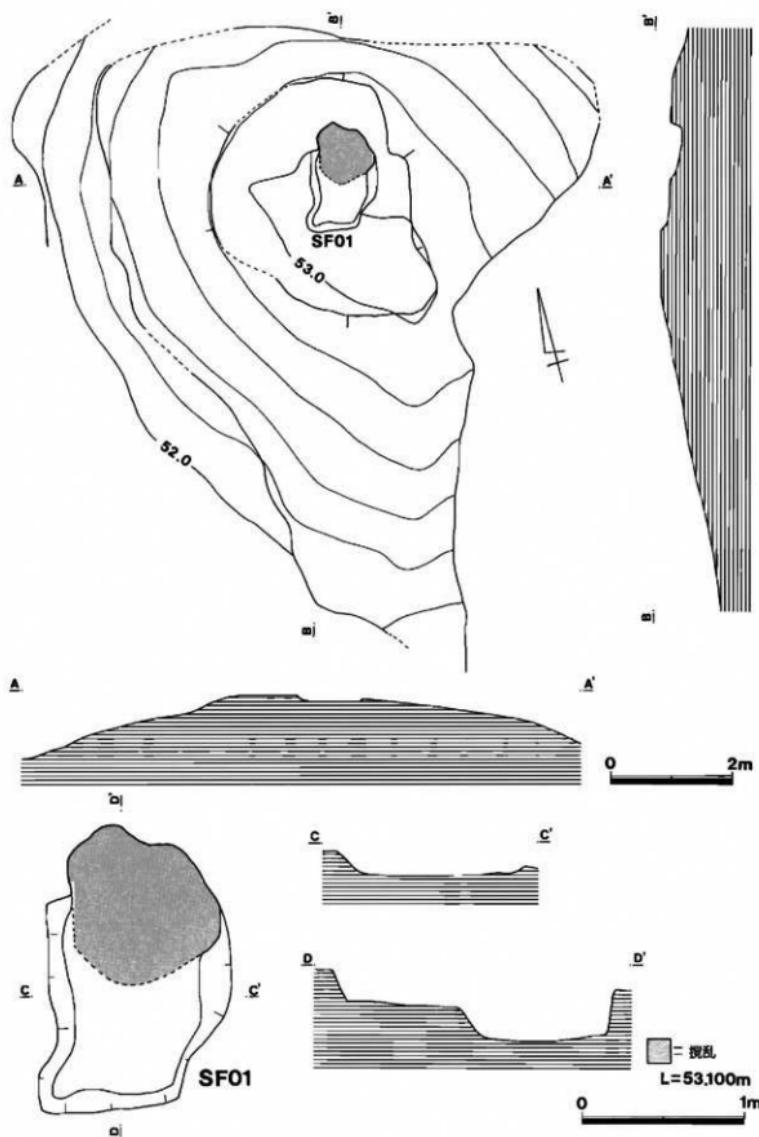
主体部は墳頂部のほぼ中央に1基検出した。主軸方位は、N-14°-30'-Eである。検出長174cm、検出幅112cmを測るが、掘り方の北側が樹根による擾乱を受けてかなりいびつな形状をしており、本来の規模・形状は不明である。検出面からの深さは20cmと浅く、底面はほぼ平坦である。埋葬形態は木棺直葬であると推測される。墳丘上の土はかなり流失していると考えられる。主体部から副葬品などの遺物は出土しなかった。また、主体部覆土のふるい掛けでも遺物は確認できなかった。

また、1号墳の南側斜面は横穴の所在が予想された。そのため表土を剥いて所在の確認をしたが、横穴は存在しなかった。表土は丘陵上から流失して斜面下段では約50cm程堆積していた。表土除去作業中に、斜面中位からは第11図20に示した陶器皿片、下位からはひっくり返った状態で第11図17に示した完形の土師器の壊が出土した。土師器の壊は古墳の上での祭祀で使われたものが下へ転落したものであると考えられる。同じく斜面下位からは第11図19に示した山茶碗の底部片が出土した。北及び西側の斜面から遺物は出土しなかった。

藏人1号墳の時期は、副葬品等が出土しなかったため明らかにできないが、古墳時代中期頃に比定されると考えられる。



第3図 藏人1号墳全体図



第4図 藏人1号墳実測図

②藏人15号墳（第5～7図）

藏人15号墳は、1号墳から東へ伸びる東西方向の尾根が小さな谷を一つ挟んだ稜線の高まりに位置する。15号墳の東側は現在住宅地となっているが、ここは「遺跡をめぐる環境」でふれた前回の造成工事に伴い発掘調査された地点である。造成前の地図をみると、北東から伸びる尾根から続いている。

調査前の現地は尾根上に直径50cm前後の雑木が乱立し、南斜面は杉が植林してあった。南斜面地表には茶樹根が残っていたことから、かつては茶畠としても利用されていたらしい。また付近の子供たちの遊び場になっていたらしく、枝で造った「隠れ家」が建っていた。尾根に沿って東西方向に幅約1m、深さ約30cm程の溝が掘られていた。この溝の用途やいつ掘られたのかは不明である。このように、現地は既にかなり大きく搅乱を受けていた。

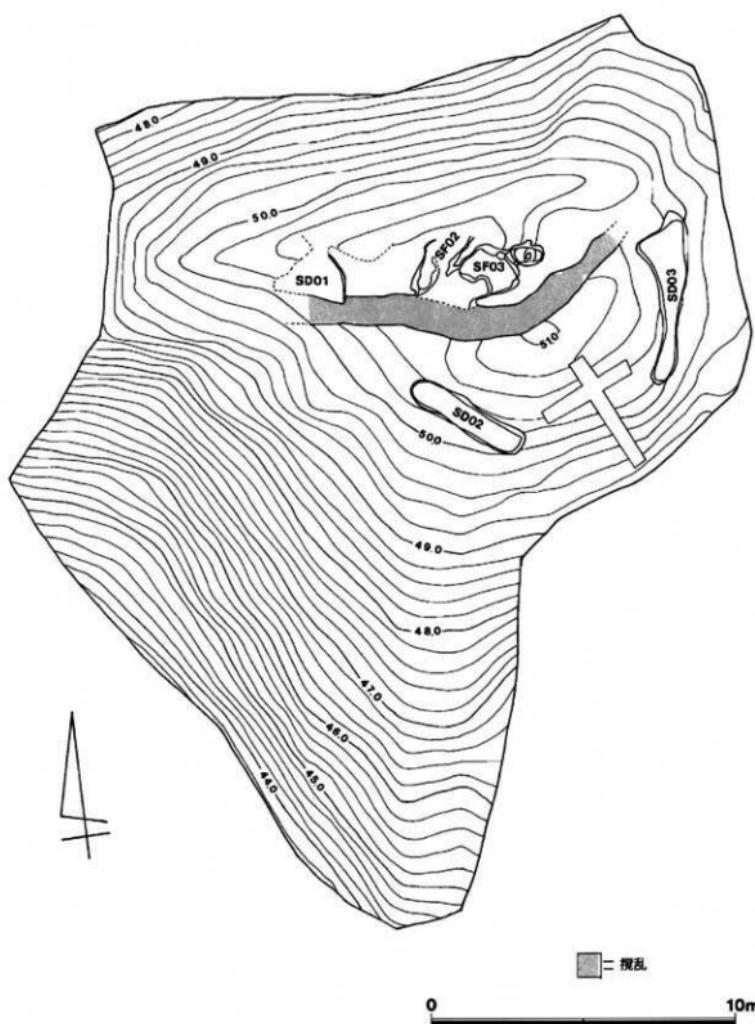
確認調査は高まりに沿って南北方向にトレンチを設定し、また搅乱である溝を東西方向のトレンチとして、古墳の所在を確認した。その結果、南北方向のトレンチの最高地から主体部と考えられる遺構の一部を検出した。さらにそこから約3m南側で地山を約50cm掘り下げる段を作った部分を検出した。これらの検出された遺構から周知外の遺跡であったが古墳の可能性があると判断し、発掘調査を実施した。

15号墳は標高51mに位置する。1号墳よりも約2m低い。15号墳周辺は造成により大きく地形が変わっているため当時の景観を復元することは難しいが、現況では市街地や市役所を望むことができる。15号墳では北を除く三方位で周溝を検出した。西側溝S D01は検出長約70cm、検出幅は不明、深さ20cmを測る。南側溝S D02は検出長412cm、検出幅80cm、深さ15cmを測る。東側溝S D03は検出長560cm、検出幅1m、深さ30cmを測る。北側溝は削平により消滅したと思われる。3本の周溝はすべて途切れた状況で検出した。いずれの周溝も後世の削平を受けたと思われ、残存部分はごくわずかであった。周溝から遺物は出土しなかった。周溝の位置から古墳の規模を復元すると、直径約12m程の円墳であると推測される。

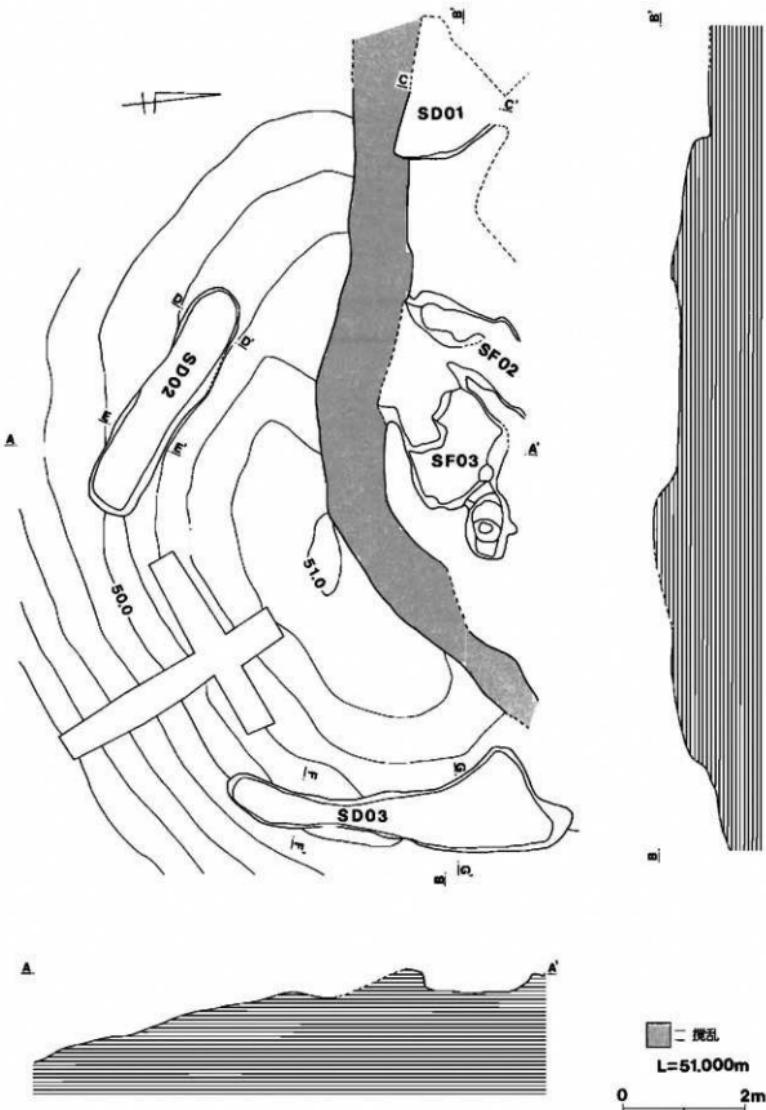
主体部は墳頂部のやや東寄りで新旧関係のあるS F02と03が検出された。いずれも平面形は長方形を呈し、埋葬形態は木棺直葬であると思われる。S F02は北側斜面の削平が主体部の北側の立ち上がりにまで及んでいる。検出長260cm、検出幅110cm、深さ10cmを測る。主軸方位はN-51°—Eである。S F03は西側の立ち上がりがS F02との切り合いでより定かではないが、検出長は不明、検出幅170cm、深さ30cmを測る。主軸方位はN-83°—WでS F02とは大きく異なる。床面は両者ともほぼ平らで高さも同じである。掘り方の遺存状況はS F03の方が良い。土層観察によりS F02の方がS F03よりも古いと思われる。

遺物はS F03から第12図21に図示した山茶碗の小片が出土した。しかしこれは古墳に伴うものではない。これ以外に遺物は出土しなかったため、古墳の時期は明らかではない。しかし、1号墳に近接する古墳であり、時期に大差はないであろう。

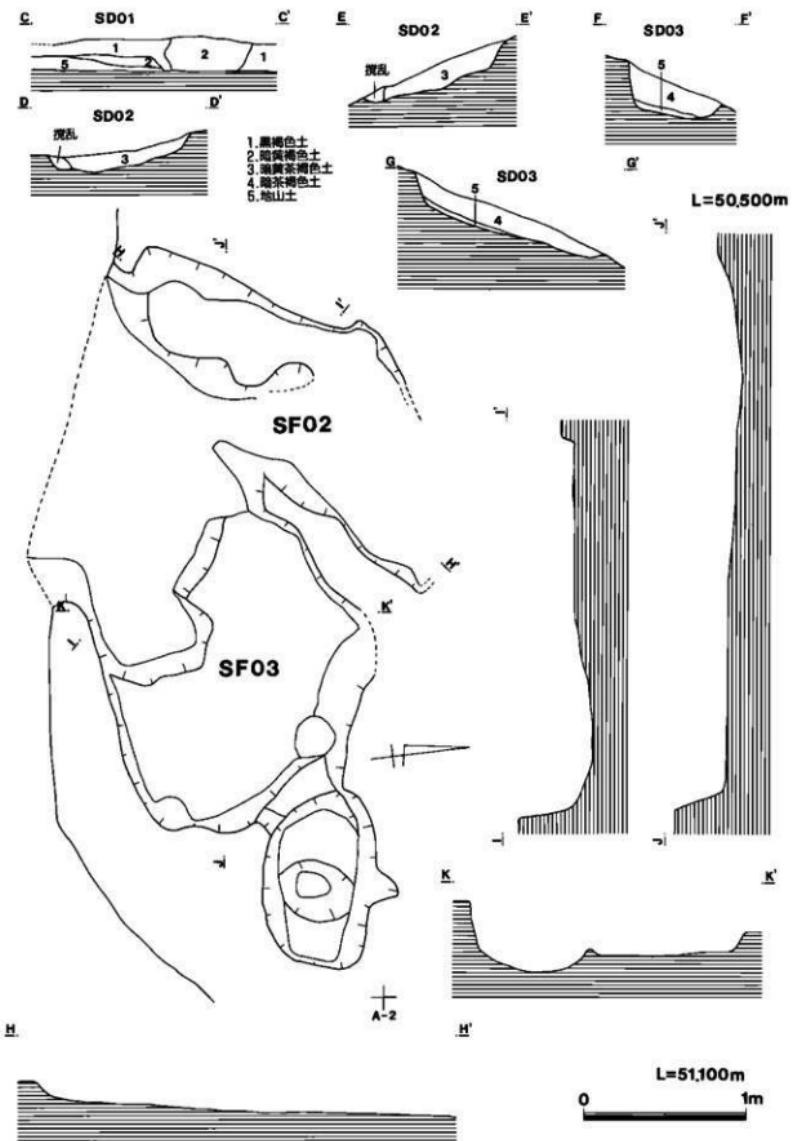
藏人1号墳と15号墳は、ともに地山の削り出しにより造られた古墳である。しかし、周溝が1号墳には伴わず、15号墳では検出された。被葬者の造墓に対する意識の違いが窺われる。



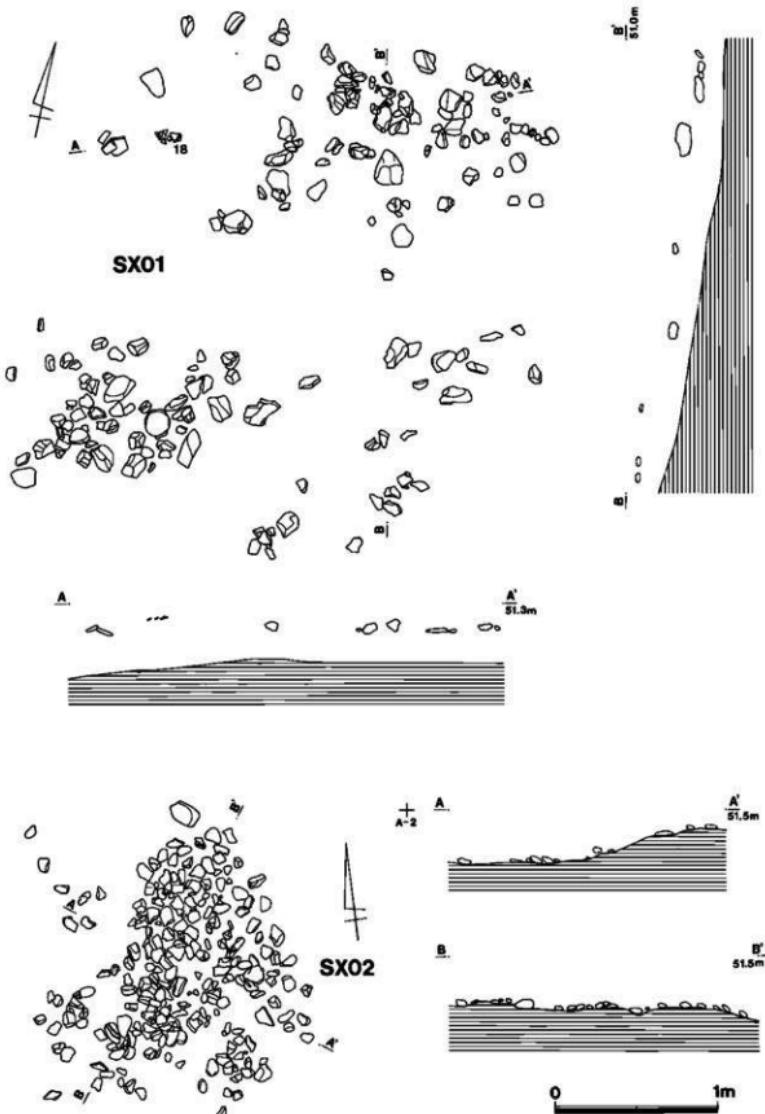
第5図 藏人15号墳全体図



第6図 藏人15号墳実測図(1)



第7図 藏人15号墳実測図(2)



第8図 SX01-02実測図

2) 集石造構

① S X01 (第9図)

S X01は、蔵人1号墳から東へ伸びる尾根上に位置する集石造構である。確認調査において尾根上に設定したトレーナーから5~20cmの大きさの礫が約2.5mにわたり集中する部分を検出した。本調査においてさらに平面的に礫の広がりを確認したところ、東西約2.5m、南北約1.5mの範囲で検出された。その範囲内で特に礫が密集している部分ではなく、無規則に散乱しているような状況である。礫が検出された部分の尾根はやや平坦面を成している。礫を取り除いた地山からは土坑等の遺構の検出はなかった。なお、礫が検出された範囲の北寄りからは、第11図18に示した須恵器片が出土した。須恵器片は細かく破碎されたような状態で一ヶ所に集中していた。S X01に伴う遺物と考えられるが、1号墳とは時期が異なり、遺構の性格も定かではない。

② S X02 (第10図)

S X02は、蔵人15号墳の主体部であるS F02・03の上面で検出された集石造構である。確認調査ではトレーナーにからなかったため検出されなかった。5~10cm程の小さな石が東西約1.8m、南北約2mの範囲に密集していた。石の大きさはS X01のものよりも小さい。出土位置はほぼ現地表面上である。遺物は出土しなかった。

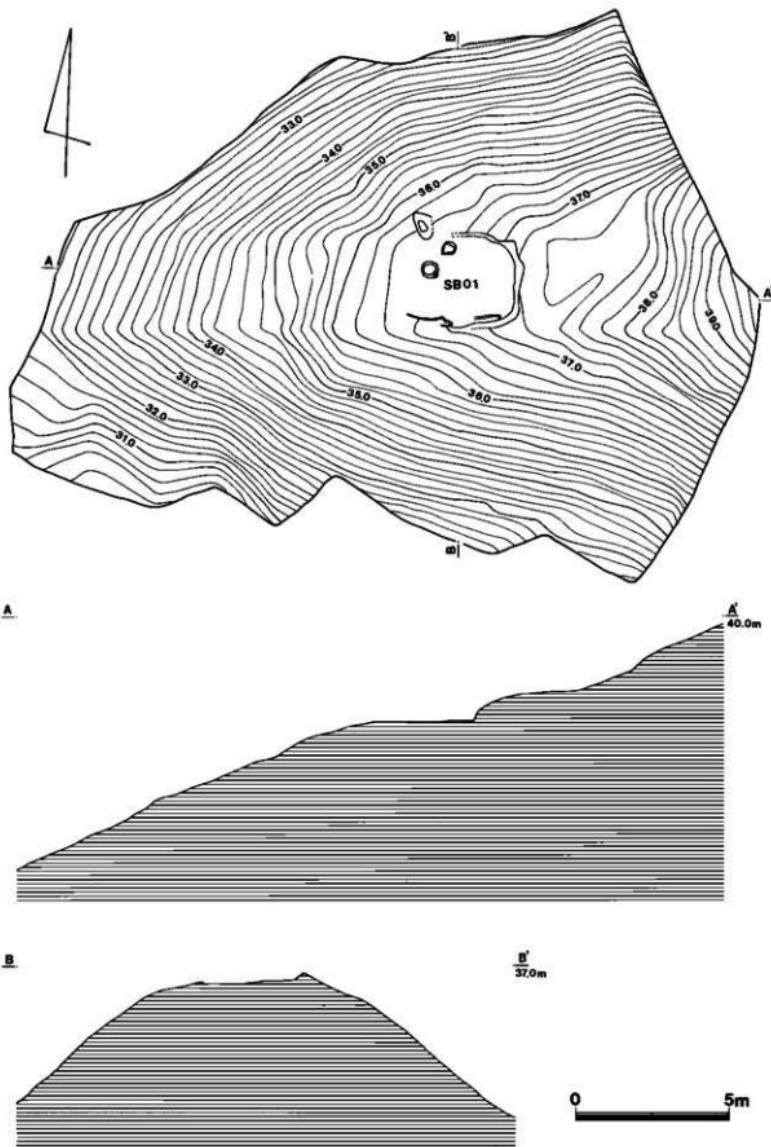
S X02と15号墳との関係をみてみると、15号墳の主体部と考えられるS F03からは古墳の時期とは異なる山茶碗の破片が出土している。このことからS X02及びS F03は中世の集石墓である可能性も考えられるが、断定はできない。また、前述したS X01とは近距離に位置しているが、2つの集石造構の規模や使用されている石の大きさなどを比較すると異なる点が多く、両者の関係についても明らかではない。

3) 蔵人Ⅱ遺跡 (第11図)

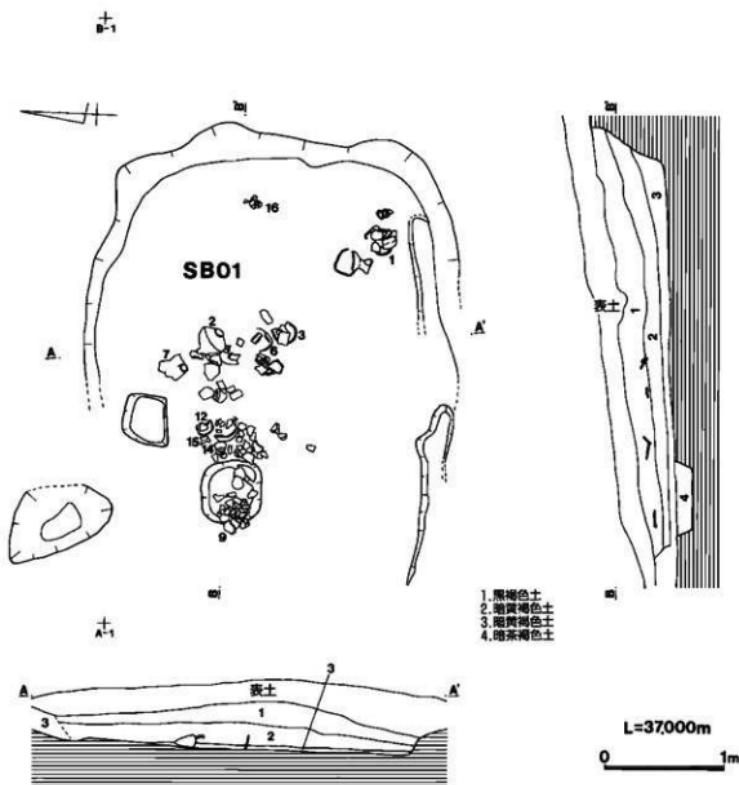
蔵人古墳群の所在する丘陵地の北西端付近に位置し、調査した2基の古墳からはかなり離れている。確認調査では丘陵中央部から西に張り出す痩せ尾根上に設定したトレーナーから、約4mの黒色土の広がりを検出するとともに多量の土器が出土した。『掛川市遺跡地図』に未掲載の新発見の遺構であり、遺跡の性格が蔵人古墳群とは異なるため、今回の調査で「蔵人Ⅱ遺跡」の名称を付けた。

① S B01 (第12図)

S B01は、トレーナーを設定した痩せ尾根の先端部付近に位置する。調査区内で尾根の傾斜をみると、標高は最高で約39m、最低で約32mを測り、約7mの落差がある。床面の標高は36.6mであり、現状での比高は約15mを測る。S B01は尾根をテラス状に削り出して造られている。住居跡の東壁以外は土砂の流失により既に削平されたと思われる。そのため規模を明確にし得ないが、推定で南北約5m、東西約4mを測る。東壁の残存状況から住居跡の平面形は隅丸方形を呈すると推定される。東壁の高さは床面から約50cmを測る。壁溝は壁の遺存している北東隅から南東隅にかけて検出された。平均の幅約20cm、深さ約10cmを測る。周全していたかどうかは不明である。床面からビットが2つ検出された。ビットの直径は35~50cmを測るが、深さは10~15cmと柱穴にしては非常に浅い。また、ビットの配置も整然ではなく住居の柱穴とは認めがたい。炉跡は確認できなかった。



第9図 藏人II遺跡全体



第10図 SB01実測図

住居跡から出土した土器は、第11図1～16に図示した古墳時代前期に比定される土師器である。これらは床のほぼ全面から出土しているが、主に尾根の稜線上付近に土器が集中している。壁際にあつた土器はおそらく土砂の流失とともに転落してしまったのではないかと思われる。住居の南東隅からは完形の壺が1点出土した（図版V参照）。残念ながら、調査期間中の一晩にかなりの降雨があり、住居跡にかけておいたビニールシート上にたまつた雨水の重みで壺が壊れてしまった。出土時の図面作成が間に合わなかつたため、第10図に示した出土状況は壺が壊れてしまつた後のものである。出土した土器はこの他にもほぼ完形に復元できたものがある。器種が確認できたものは壺6点、甕3点、高杯1点である。これらの土器は出土状況から、住居内の土器を持ち出すことができずに廃棄されたものであると考えられる。

2. 遺物

今回の調査で出土した土器のほとんどが、蔵人II遺跡のSB01から出土した土師器である。これらは古墳時代前期に比定される土器群である。古墳や集石遺構からの遺物を含め、調査全体での出土遺物量は、テンバコ（ $54.5 \times 33.6 \times 20\text{cm}$ ）3箱分とわずかであった。このうち、器形が復元できたものや時期が特定できるものを抽出して図示した。

1～16はSB01から出土した古墳時代前期の古式土師器である。

1～11は壺型七器である。1は完形で器高24.8cm、底径5.6cmを測る。折り返し口縁を成し、口唇部端面に刻み目を施す。器面は荒れているが一部に斜位ハケが認められる。

2は口縁部を欠損するが、残存高22.5cm、底径8.1cmを測る。器面は荒れているが胴下半部にミガキがみられる。内面には横位のハケがみられる。

3と4は接合点がないが出土状況からみて同一個体と思われる壺である。3は頸部から胴部片、4は胴部から底部片である。壺の器高は3と4とを合わせて復元で24cm以上、底径は6.5cmを測る。

5は口縁部と胴下半部から底部を欠損する。残存25cmを測り、出土した壺の中ではいちばん大型である。器面に縱及び斜位のハケがみられる。

6は頸部から胴部片である。器面が荒く調整は不明である。肩部には出土した壺の中で唯一突帯が認められる。

7も6と同様に頸部から胴部片である。6に比べると大型の壺である。調整は不明である。

8は口縁部片である。推定口径約16cmを測る。口縁部端面のほとんどは剥離しているが、刻み目が施されている。内外面にはハケがみられる。

9～11は底部片である。底径は9は9.5cm、10は9.3cm、11は5.5cmを測る。

12～15は壺型土器で、いずれも台付壺である。12は頸部から胴部片である。口縁端部は欠損する。胴部は球状を呈する。外面には縱位ハケ、内面には横ナデがみられる。13～15は脚台部片である。13・14は外面に縱位ハケ、内面に横位ハケがみられる。15は内面の調整は不明である。

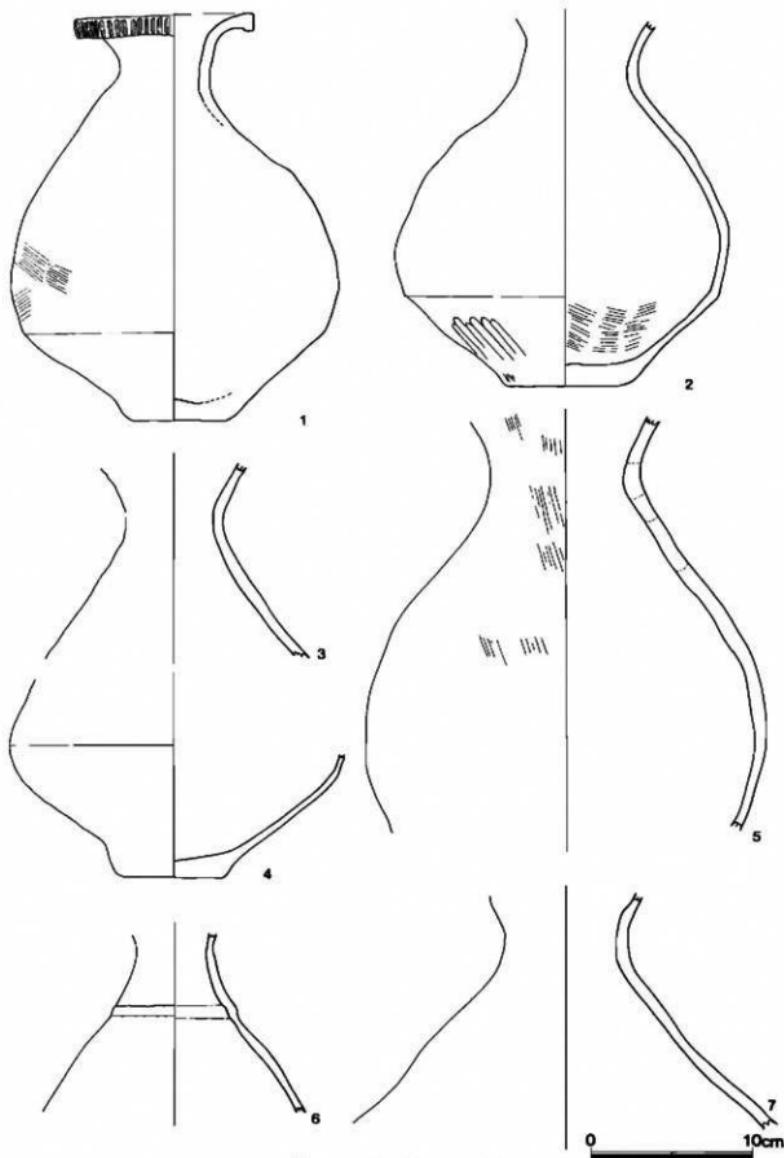
16は高坏で1点のみの出土である。残存高は8.9cmを測る。透かし穴から下部を欠損する。坏部は深い碗状を呈し、脚部に円形の透かし穴が三方に開けられている。

17は蔵人I号墳調査地点の南側斜面から出土した完形の土師器の坏である。口径は13.5cmを測る。器面は荒れているが一部にハケ目が認められる。

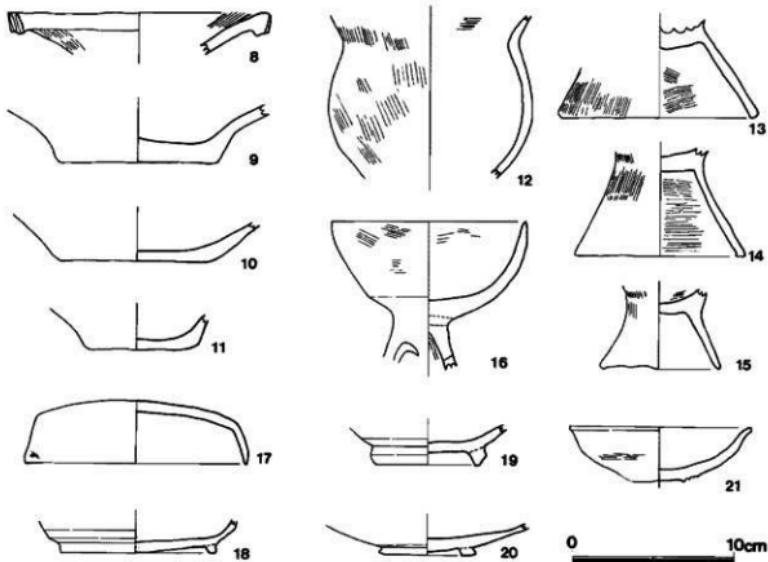
18はSX01から出土した須恵器である。推定高台径約9.4cmを測る。口縁部を欠損する。

19・20は蔵人I号墳調査地点の南側斜面から出土した陶器である。19は推定高台径6.6cmを測る。やや分厚い高台が付く。口縁部を欠損する。20は推定高台径6cmを測る。高台は低い。平たい皿状である。内外面に釉薬が塗布されている。

21は蔵人15号墳のSF03から出土した小碗片である。推定口径11.5cmを測る。底部には高台が取れた跡が見受けられる。



第11図 出土遺物実測図(1)



第12図 出土遺物実測図(2)

IIIまとめ

今回の調査では、古墳時代中期と考えられる古墳2基と古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、時期不明の集石遺構2基を検出した。得られた成果をもとに、まとめとして若干考察してみたい。

(1) 藏人古墳群

藏人古墳群は1号墳と15号墳の2基の古墳を調査した。前回調査や確認調査の成果を含め、改めて古墳群全体についてまとめてみたい。前述したように『掛川市遺跡地図』では藏人古墳群は10基の古墳により構成される古墳群としているが、これまでに調査された7基と未調査の3号墳を含めると合計8基からなる古墳群ということになる。前回調査の内容に一部不明な点があるため、今回調査された古墳との詳細な比較・検討はできないが、出土状況が明らかではないものの出土遺物の種類・点数は把握できている。よって、出土遺物についてこれまでの調査との比較・検討を試みたい。

「調査の内容」で説明したように、今回調査された2基の古墳の主体部からは古墳に伴う遺物が全く出土しなかった。前回調査された5基の古墳からは鉄剣等の副葬品が出土している。また、これまでに市内で調査された主な古墳についてまとめた一覧表が『掛川市史上巻』に掲載してある。それによると、遺物の種類や点数に違いが見受けられるものの、ほとんどの古墳から遺物が出土している。

同じ群に属する古墳でありながら副葬品の有無が確認された古墳群の調査例として、袋井市の若作古墳群が挙げられる。若作古墳群は現在までに21基の古墳が調査されたが、このうち副葬品が出土し

たのは8基に過ぎない。同一群内の古墳の副葬品にみられる階層差が存在する理由は明らかではない。また、若作古墳群の周辺には鏡や馬具、鉄製武器等が出土した上石野古墳群や愛野向山古墳群が存在する。同様に藏人古墳群の周辺をみると、前述した赤渕古墳群から鉄劍や馬具が出土している。このように、藏人古墳群と若作古墳群及びそれぞれの周辺の古墳群の副葬品について比較してみると共通性が見い出され、当該地域における古墳の特徴であると指摘することができよう。

藏人1号墳と15号墳は、ほぼ同様の墳丘規模や埋葬形態を有する古墳であるが、2基の古墳の違いは周溝の有無にある。15号墳は周溝の配置から方形周溝墓の可能性もあるが、それを裏付ける遺物が出土していないために断定はできない。また、1号墳は地形的に制約されているため、周溝を造ることができなかつたのではないかと考えられるが、これは古墳築造に対する被葬者集団の意識の違いを示していると思われる。

(2) 藏人II遺跡

今回の調査において古墳時代前期の住居跡を1軒検出した。昭和60年度の調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡3軒、掘立柱建物3棟等を検出した。両地点は直線距離で約20mほど離れており、舌状に派生した尾根により遮られ、相互に直視できない位置関係にある。さらに両地点の住居跡は時期が異なることから、同時期の同一集落内に属するものではないと思われる。藏人II遺跡の周辺の微高地には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての藏人遺跡や小島遺跡が所在し、弥生土器や土師器の破片が表採されている。そのため、この地域には弥生時代後期から古墳時代初めにかけての小規模な集落がいくつか営まれていたと推測される。

このような集落遺跡のあり方は、「遺跡をめぐる環境」で紹介した赤渕遺跡に酷似している。赤渕遺跡との共通点として、①住居跡が検出された丘陵は独立丘陵で、痩せ尾根の先端に位置する。②周辺の丘陵上にある遺跡からは弥生時代後期を中心とする古墳時代前期にかけての遺物が表採されている。③しかし、住居跡から出土しているのは弥生時代後期の遺物ではなく、古墳時代前期の遺物のみである、という3点が挙げられる。

赤渕遺跡報告書では同形態の集落の調査例として、袋井市の若作遺跡を挙げている。若作遺跡は前述した若作古墳群と同じ、小笠山北側の狭い丘陵地に位置する弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落である。このうち弥生時代後期と古墳時代前期の集落が遺跡地内の別地点にあることから、弥生時代後期から古墳時代前期への集落の存続性の断絶を窺わせている。

藏人II遺跡と赤渕遺跡はともに古墳時代前期の住居跡が1軒のみ検出された。ただし、赤渕遺跡では既に削平された部分があり、方形周溝墓の周溝と考えられる構造も検出されていることから、かつては墓域を含め、複数の住居で形成された集落であった可能性はある。しかし、調査によって検出された遺構からは、若作遺跡のように同じ遺跡地内の別々の地点に時期の違う集落が存在していたとは断言できない。

掛川市内では弥生時代後期になると、台地や丘陵上に営まれる集落が急増する。その理由として、平地では洪水被害等の自然環境による影響と集落間の格差が生じたことによる社会不安がからみあつた結果であると考えられている。また、若作遺跡の古墳時代前期の集落形成は政治的な動きに呼応して出現したと報告書で指摘している。この指摘が藏人II遺跡と赤渕遺跡をはじめ、市内の古墳時代前期の集落に該当するかは事例不足のため、現時点での検討は不可能である。

藏人II遺跡の住居は、わざわざ痩せ尾根を造成した平坦面に建てられていた。建てられた理由が前述したような自然環境の影響や社会不安、政治的な動きに呼応したものであるかどうかは調査担当者

の力不足故に断定はできなかった。さらに完形の土器を含め、1軒の住居で使用するにはやや数が多い印象のある土器の出土状況など、この住居跡にはいくつかの特異な点が挙げられる。

若作遺跡に近接する掛川市の居村遺跡では丘陵上に弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての住居跡が検出されている。これらの集落は永続的な居住を目的としたものではなく、短期的に営まれ、廃絶された極めて小規模で、拠点的集落から派生した分村的な集落であると位置付けている。藏人Ⅱ遺跡で検出された住居跡も周辺遺跡から派生した分村的な集落の中の一つの住居跡である可能性も考えられる。

今回の調査のように、市内には周知外の遺跡がまだ数多く残されている。さらに新たに発見される遺跡は今後も増えることが予想され、市や地域の歴史を復元する上で必要となる資料は蓄積されていく。しかし、遺跡そのものは消滅してしまう。また、発掘調査により得られた成果や派生する課題を検討するには、現場で数多くの成果を収集することが必要であること再認識して、今後の調査の反省点としたい。

〈参考文献〉

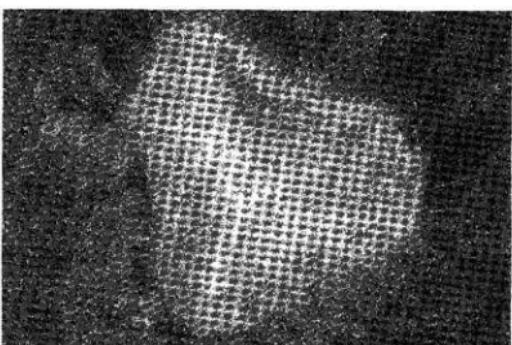
- 掛川市教育委員会 「掛川市遺跡地図・遺跡地名表 平成5年度」 1992
掛川市教育委員会 「赤瀬遺跡・中川原古墳発掘調査報告書」 1992
掛川市教育委員会 「六ノ坪Ⅳ遺跡・源ヶ谷古墳群発掘調査報告書」 1997
掛川市史編纂委員会 「掛川市史 上巻」 1997
袋井市教育委員会 「若作遺跡・若作古墳群」 1990
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 「小笠山総合運動公園内遺跡群」 1997

図 版

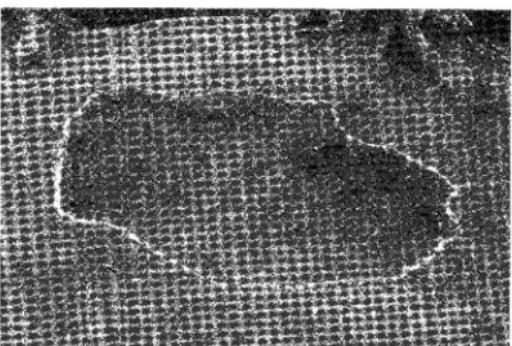
図版 I



発掘調査区全景（左から蔵人15号墳、1号墳、蔵人II遺跡）



蔵人1号墳全景（空中写真）

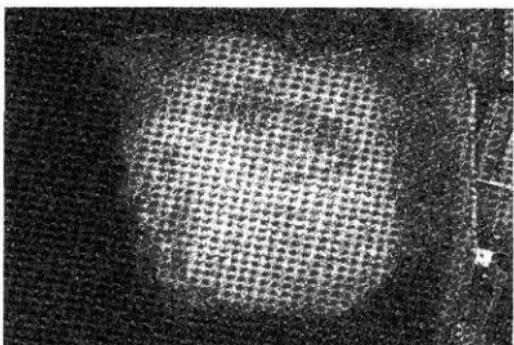


蔵人1号墳主体部完掘状況（北東から）

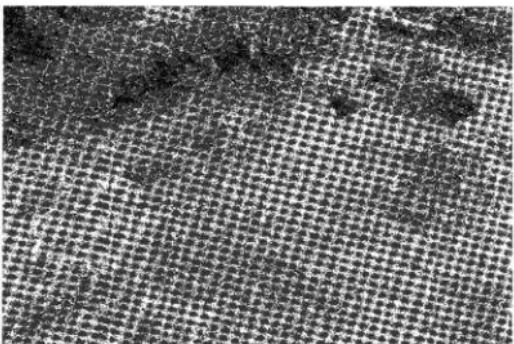
図版
II



土師器壺出土状況（南東から）

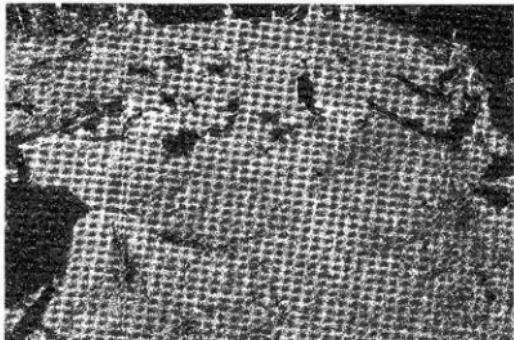


藏人15号墳全景（空中写真）

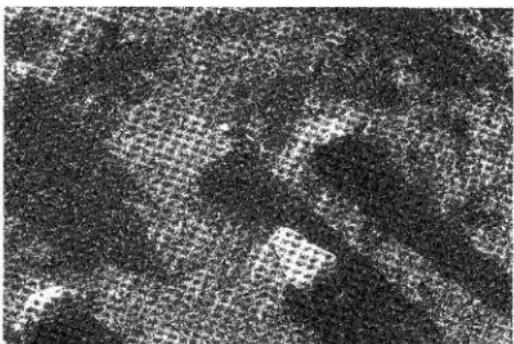


藏人15号墳主体部完掘状況（南西から）

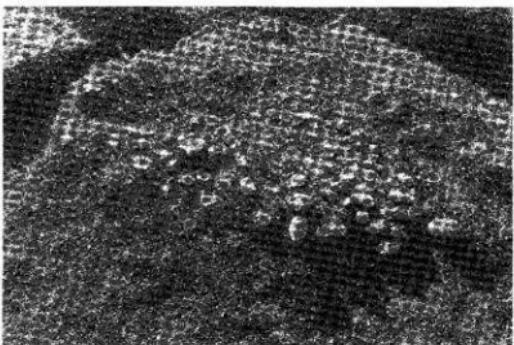
図版 III



SX01検出状況（西から）

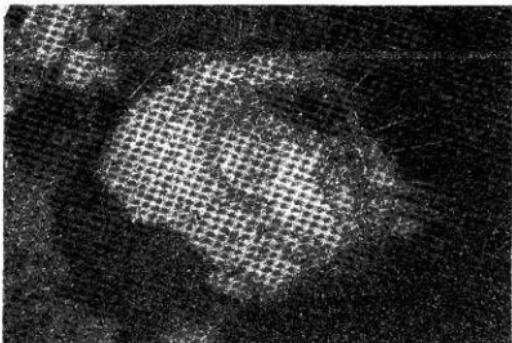


SX01土器出土状況（北から）

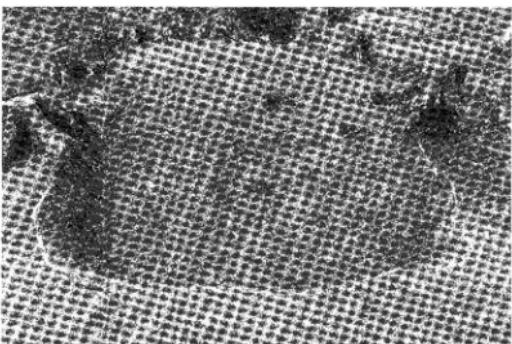


SX02検出状況（北東から）

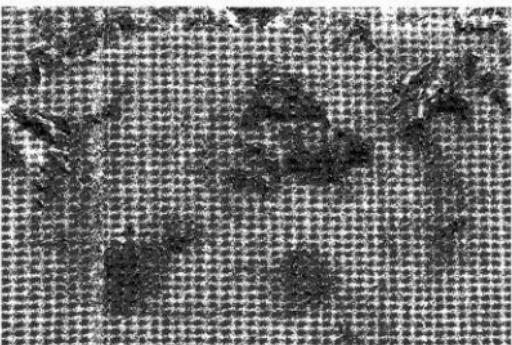
図版
IV



藏人II遺跡全景（空中写真）

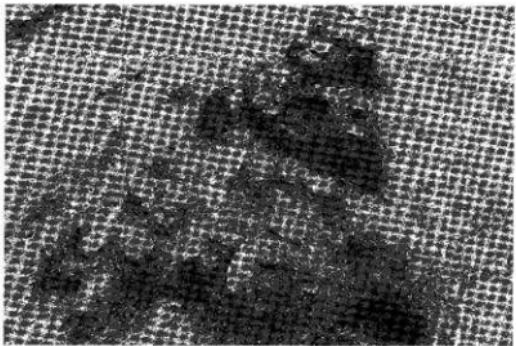


SB01完掘状況（東から）



SB01土器出土状況（東から）

図版
V

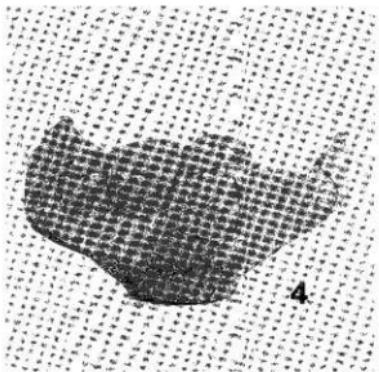
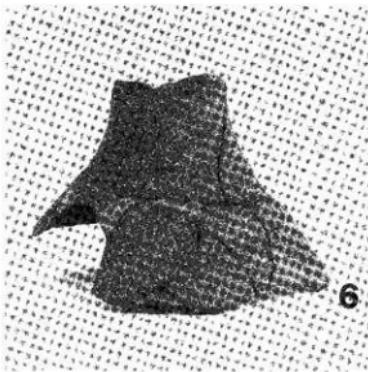
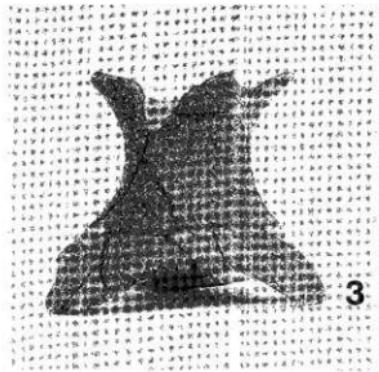
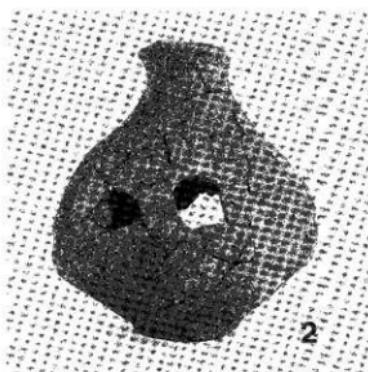


SB01土器出土状況微細1（東から）

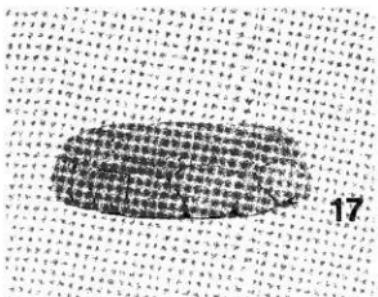
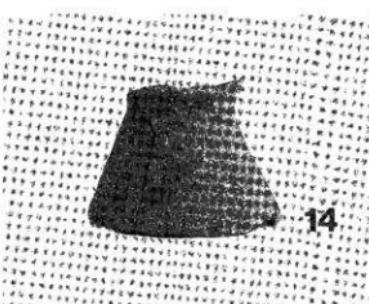


SB01土器出土状況微細2（破損前、南西から）

図版 VI



図版
VII



18

19

18

19

20

21

報告書抄録

ふりがな	くろずこふんぐん・くろずにいせき							
書名	藏人古墳群・藏人II遺跡							
副書名	発掘調査報告書							
編著者名	村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537)21-1158							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コ一ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査因
		市町村	遺跡番号					
くろずこふんぐん 藏人古墳群 くろずにいせき 藏人II遺跡	しづおかけん掛川市 静岡県掛川市 下垂木字三田 ヶ谷863-1他	22213	129-1-15 517	度 分 秒	度 分 秒	1997.11.04 ～ 1998.03.31	370m ²	住宅団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
藏人古墳群	古墳	古墳時代中期	古墳2基 集石遺構2基	土師器(壺) 須恵器				
藏人II遺跡	集落?	古墳時代前期	竪穴住居跡1基	土師器(壺・甕 ・高壺)				

藏人古墳群・藏人Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

1999年3月31日

編集発行 挂川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701番地-1
TEL (0537)21-1158

印 刷 株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248番地-1
TEL (0537)24-0013